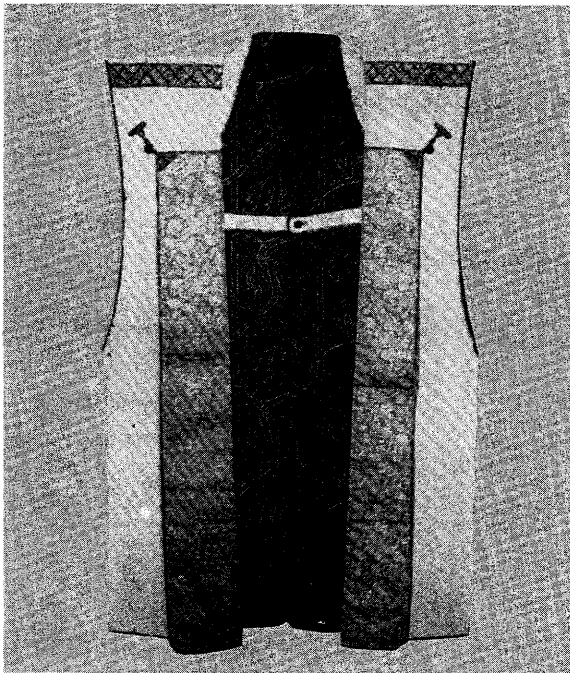


# 郷土あらいらい

郷土館だより  
第37号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

## 五日市の千人同心



千人隊陣羽織 八王子市 山本哲雄氏所蔵

### はじめに

千人同心は千人隊とも呼ばれ、八王子に本拠をおく在郷武士団である。千人隊の発足は、甲斐の武田氏の国境警備組織を草創期の徳川幕府が、八王子周辺の警備と江戸防衛に再編したものとされる。10人の千人頭（旗本）の大半は旧武田家臣で、それぞれ100人の隊員（同心）を擁し、100人は更に10組に分れ、10人に1人の什長（組頭同心）によって統率された。

同心というのは下級武士で、戦闘に際しては槍隊や鉄砲隊を編成した。扶持（給料）は平同心で年間「13俵1人扶持」（1人扶持は1日米5合の365日分）を支給され

る。俸禄だけでは家族を養うに足りない。従って、屯田兵のように在郷し農業を営む。ただし村内では村役人や有力百姓が多かった。

江戸二百七十年の泰平がつづく、千人隊の軍事力は不急不要となり、江戸市内や日光廟の火の番役に流用された。江戸後期には日光勤番が唯一の任務となった。当時の日光勤番は50人編成で半年交替であるから、平同心にとって数年に一度廻ってくるに過ぎず、それも代番とって身代りを頼むことも可能であった。

ところで、当初八王子周辺に集住していた隊員は歳月を経るに従い、拡散の傾向が出た。それは適当な後継ぎがなく、親戚筋が相続したり、或は生活に窮し、同心株（扶持米受給権）を売却するものが出てきた為である。百姓にとって、低いとはいえ武士身分は魅力であり、年々支給される禄米も結構な副収入となる。富農層の中に株購入希望者が絶えないわけで、その傾向は幕末にゆくにつれて加速した。

嘉永7年（1854）の「千人同心姓名在所図表」によれば、五日市地区の千人同心数は下表のようになる。

旧村名	留原	伊奈	網代	横沢	五日市	小和田
人数	7	6	4	3	3	2
旧村名	戸倉	三内	深沢	入野	小中野	合計
人数	2	2	2	1	1	33

八王子に近い留原、網代に多いのは、八王子を核として、波紋状に伝播した為であろう。五日市地区の同心は原則的に株の購入か、婚姻等の委譲によるものと推測される。

千人同心については、近年資料集や解説書が続々発刊されているが、ここでは郷土館手持の文書資料によって、当地千人同心の種々相を紹介し、あわせて地域史の一断面を描いてみた。（文責・石井道郎）



上田庄兵衛 書状2

大修理が行なわれていて景気がよい。値段もよく売れると思われるので、黒八丈1、2疋送ってもらいたい。

2 それにつき、八王子ではいくら、日光ではいくらと値段をつけ、山本与一殿（推定・同郷の千人同心）自身に持ってきてもらいたい。品物はシミなどないようよく点検すること。日光でも世話をしてくれる者がいるので相応に売れると思う。

3 出発の際、山田村の次郎右衛門殿と、伊奈の万吉殿から膳碗（塗器）の注文をうけたが、くわしい希望を聞いて知らせてもらいたい。

4 タバコ、帰郷までに足りないのので、1、2斤届けてもらいたい。（3、4は追而書）

書状2 年不詳 10月7日 宛名上田卯八（子息か弟か）

1 縞（織物）2疋確かに受取った。値段も尺もいってこないのが困ったが、まかせるといことなので、袴地1両2分、お納戸1両2分2朱の値をつけた。その他詳細は帳面にして送る。

2 入湯願を出して許されたので、12日間程湯面川という所の妙湯に入ってきた。3分程費用がかかった。

3 男体山のお札1枚送る。粗末に扱わず、滝山の病人にやってほしい。

4 先便の黒八丈、6丈2尺ということなので、1両1分2朱に売ったが、6丈しかなかったので値引をした。こんな間違いのないように注意してもらいたい。

（4は追而書）

当時の日光勤番は12月と6月交替で、千人頭1名に率いられた組頭・平同心あわせて50名が当る。赴任のコースは八王子出発、拝島―松山―佐野経由、日光まで約40里（160キロ）3泊4日の行程である。日光では番屋敷に宿泊する。勤務は午前10時と午後2時の2回、日光山内と日光町内を巡回する。強風や地震の日など臨時の見廻りがあり、寒中の火の見櫓の見張番などは特につらい勤

務という。（村上直編『八王子千人同心』馬場憲一氏論文参照）

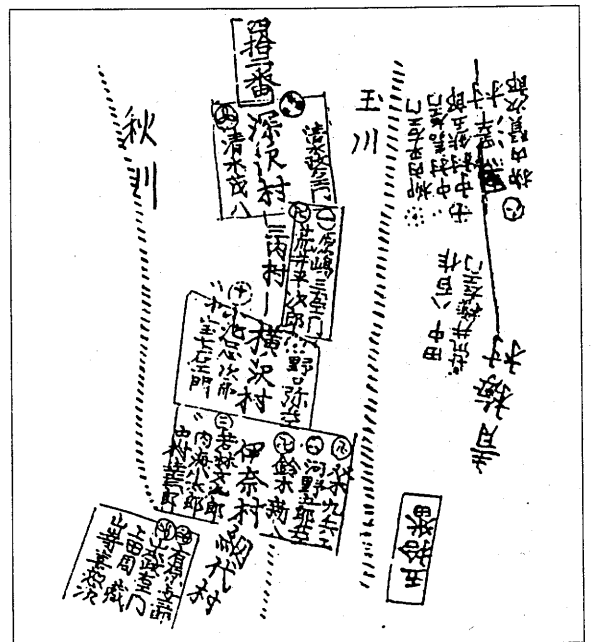
交替制勤務であろうから、非番の日は自由時間もあり、特例かも知れないが、庄兵衛のように入湯休暇もありうるようだ。

日光勤番には役手当がつくが、それは1両2、3分程度で、小遣をいくらケチっても半年間では足を出す。庄兵衛のように温泉につかろうとするなら、それなりの才覚を働かせなければなるまい。庄兵衛の家業は織物の仲買でもあったろうか。この手紙には身についた商人気質がうかがえる。幕末期の農村には貨幣の浸透とともに半農半商の人がふえた。才覚のある者ほど売買の甘味を知り、チャンスを捉えて機敏に立廻る。日光勤番も庄兵衛にとっては、チャンスの一つであったようだ。

上田家には、上田周蔵名の嘉永7年正月「日光在勤中日記」があるが、この内容は、ペルリ来航に関する老中、大目付から千人頭への示達の写しに終始している。

時代は嘉永6年のペルリ来航を機に大きく揺れ、万延元年の井伊大老暗殺で暗転した。庄兵衛さんと周蔵・藤次郎氏の間にある20年は一つの曲り角で、庄兵衛さんの時代までは、まだ太平楽なムードがあった。

### 3. 世話好きな組頭同心



嘉永7年「千人同心在所図表」より

旧網代村の千人同心有原（在原）家は五日市ではめずらしい組頭同心である。組頭は扶持米も平同心の倍30俵

ほど給せられ、組下同心の統括にあたる。分散している在村同心の掌握には世話のやけるものがあつたらう。

現青梅市西分の山崎康雄家にはその間の事情をうかがわせる書翰類がある。山崎家の先祖山崎喜惣次は嘉永7年の「同心在所図表」によれば、秋川筋の42番組に属し、住所は網代村となっている。山崎家は西分村の分限者で、7つの倉をもつといわれた。登録住所網代村名主五兵衛方は購入株の都合であつたらう、喜惣次は嘉永5年に住居替えを願い出、多摩川筋の50番組へ転居を希望した。(何番組というのは千人頭系統とは別に住所別に編成された組)これを世話したのは組頭有原与三郎で、同人の喜惣次あて書状によれば、多摩川筋に明き跡がなければならぬこと。運動費として御頭(千人頭)組屋敷組頭、世話人、月番その他関係方面への挨拶料など合計2両2分から3両くらいは必要であると記している。「拙者不実の御世話は取計らい申さず候間、私共にお任せおき下され度」との文面であつた。

千人同心の居住地に一定の規制がされていることが窺えるが、放置すれば同心の所在は株の売買によって果てしなく拡散し、統率に支障をきたす恐れがあらう。50番組は北限であり、喜惣次の組替え希望は2年後の「同心在所図表」をみるかぎり実現していない。

山崎家には有原組頭の書状がいま1通ある。日付は9月18日で年は不詳であるが文面からみて元治元年(1864)頃と推察される。内容は御進発(長州征討)上洛のさいの代人斡旋である。「この手紙を持たせた使いの者は私の懇意な者で、手堅い人物であるから遠国の代番に出してもよろしい。貴方か、田中八百作(青梅村の千人同心で、山崎家の親戚)か、どちらかで使つてはどうか。詳しくは本人から直接聞いてもらいたい」という文面である。有原組頭の書状は懇切鄭重で、配下の同心に対する調子ではない。思うに山崎家では有原組頭を通して株を購入し、組頭はそのアフターサービスにつとめているのではあるまいか。

千人同心が第二次長州征討に出陣したのは慶応元年5月。編成は銃隊300名、長柄方100名で、大坂城を根拠に警備任務についた。彼等が前線へ配備され、長州奇兵隊と銃撃戦を交えたのは、1年後の慶応2年7月、九州小倉においてであつた。史書によれば、この時の千人隊は必ずしも戦意旺盛とはいひ難かつたようである。

## おわりに

幕末期の五日市地区には千人同心株の購入が一種の流

行となつた。深沢村名主清水茂平(五日市憲法で有名な深沢権八の祖父)は嘉永2年、高19俵1人扶持の平同心株を110両で購入した。禄米の多い分だけ割高になっている。彼は実父茂八を同心名儀人とし、安政5年茂八が死去すると、18才の倅雅楽之助(のちの名生)に継がせている。これで見ると、勤務も代番ですませていそうである。

五日市村名主萩原利兵衛は次男に株を買い与え、隣家の酒造業内野家では養子小兵衛の為に購入している。両家とも例の「同心在所図表」に載っていないところを見ると、嘉永7年以降の購入と察せられる。幕末のインフレ金の投資場所として同心株に目をつける—NTT株の購入と似た動機と心理である。村内では目はしきく有力者たちの配慮も、ご一新によって無に帰した。狭い村社会の中から幕府の崩壊まで見透せという方が無理注文であらう。

王政復古後千人隊は解散し、その大半は帰農して平民籍となつた。また一部は明治政府に仕え、警護要員(護境隊と呼ばれた)となり、さらに一部は操をたて通し、徳川家に従つて静岡に赴いた。内野小兵衛は純情な青年とみえ、静岡ゆきを志願した。しかしそこに待ちかまえていたのは予想外の開拓生活であつた。筆者は内野家で小兵衛の「病気に付き帰郷願」(下書)を見た。内野家は裕福な地主で造り酒屋である。小兵衛にとって未経験の苛酷な労働生活は彼の肉体を蝕んだものとみえ、彼は帰宅後病没している。明治18年正月、深沢権八らとともに「国会開設期限短縮建白書」を元老院に提出した神奈川県会議員内野小兵衛は千人同心小兵衛の襲名者(兄弟か)で、筆者が『多摩のあゆみ』23号「千人同心と自由民権運動」の中で同一人とみたのは誤りであつた。

千人隊はうち続く泰平の世にあつて、本来の軍事任務に替え、「火の番役」をあてがわれた。在郷の同心衆は、村内では武士身分を抑えられ、村の習慣、序列に従うことを要求された。ここに例示した五日市地区の同心衆の生態をみても、武士の誇りをかざした生き方はとりにくい立場にあつたことが察せられる。

幕末期、千人隊に対し俄に軍事任務が当てがわれたのは歴史の皮肉で、隊員の多くは、時代も自己も見据える暇もなく、烈しい渦にまき込まれた。しかし見方によれば、千人同心であつたが故に、一般百姓とは異質の体験を味わえた者も多い。それは一つの幸せとも解せる。

参考図書 村上直編『江戸幕府・八王子千人同心』  
雄山閣